



ご紹介いただきました多賀城高等学校の小泉でございます。私からは多賀城高校が取り組んでいる防災教育とESDの関係について概略を説明し、後半には生徒から活動の一端を説明させていただきます。

多賀城市は仙台市の北東に隣接しており、陸奥国府が置かれた歴史ある町です。仙台港には工場や倉庫群があり、内陸部は仙台市のベッドタウンとして住宅地が広がっています。東日本大震災のときには、津波により市内の約34%が浸水しました。海の見えないところ、海とは違う方向から津波が押し寄せる都市型津波の被害により、188名の貴い命が奪われました。

多賀城高等学校は海から少し離れた高台にあることから津波の被害は免れましたが、その日のうちに帰宅できない生徒108名が学校で一夜を明かしました。近隣の石油コンビナートでは火災が起り、いつ爆発が起こるか分からない恐怖の中での避難でした。

宮城県では被災地に立地していること、全県から志の高い生徒が通学できること、そして、上級の学校でさらなる学びが期待できる高校として平成28年4月に日本で2番目となる防災系学科、災害科学科1クラスを本校に開設することにしました。教育目標はここに示したとおり、防災や災害を学習することを通して未来を予想する能力、課題を解決する能力、そして、リーダーシップやコミュニケーション能力を身に付けさせることで未来を創る力を育てていきたいと、開設準備を進めているところです。

これをESDの視点で捉え直してみると、持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける。このことを通して、持続可能な社会の形成者としてのリーダー的資質を養うと捉え直すことができます。

ESDの基本的な考え方の一つとして防災学習が取り上げられますが、本校の学習内容として検討している事項を当てはめてみると、この図のようにさまざまな基本的な考え方に当てはめることができます。本校では普通科も含めた学校全体で防災教育のパイロットスクールの役割を果たすために、現在はESDの観点から主に三つのプログラムを試行しております。

一つ目は、防災学習プログラムです。防災・減災についての基本知識を身に付け、地域の調査から課題を見つけ、情報収集し、グループ学習やワークショップを通して内容を深め、最終的にはその成果を地域に発信するプログラムです。

二つ目は、国際理解プログラムです。JICAのプログラムを活用したり、外国からの旅行

者に被災と復興の様子を生徒自らが効果的に伝える工夫を行うプログラムとなっています。

三つ目は、自然科学学習プログラムです。自然災害を科学的に捉え、課題研究を通して理解を深め、その成果を発表していくプログラムです。専門性の高い発表を行う一方で、災害のモデル化を行い、小中学校への出前授業を行うことも検討しています。今後、これらのプログラムの充実を図り、21世紀型学力の目指す、生徒が主体的に課題を解決するための資質・能力の育成を、大学や関連機関、地域自治体などと協力しながら進めていきたいと考えております。

次に三つのプログラムのうち、主に防災学習プログラムについて、生徒のほうから報告をさせていただきます。私からの概略説明は以上です。

生徒 多賀城高校における防災についての学習を紹介したいと思います。ここにありますように、ESDの学習プロセスを応用しております。災害の専門家の講義から知識を得、地域のために何ができるか、多賀城市の被災地の津波の高さを調査しました。

災害が起こりますと、復興のプロセスの際に問題があります。われわれの結果をコミュニティの人たち、海外の人たちと共有しています。学生は災害のときに生き延びる能力だけでなく、他者と今後のために問題解決する能力を身に付けねばなりません。そして災害後、津波について将来世代に伝えねばならないと考えました。そこで、津波標識を設置することにしました。また、津波の経験者は「思い出したくない」と言う方もいらっしゃいます。しかしながら、忘れたい思いもあるが高校生の活動ならば応援をしようということで、電柱の所有者の許可を得まして標識を設置しています。この写真は、電柱に標識を設置している様子であります。100本ほど設置をしました。

次の事例は、「地域への発信と交流」です。高校生は災害の際に何ができるかということを考えました。そこで多賀城市の総合防災訓練に参加をし、地元の人たちと協力をしました。多賀城市はまた、津波標識のプログラムも検討しました。これは多賀城市との協力の始まりでありました。

こちら、もう一つの地域への発信と交流の事例です。仙台キャンプに参加しました。これは被災体験プログラムであります。いかにして、災害が起きたときに生き延びるかを学びます。また災害経験を、日本のほかの地域の方々と共有しました。次の事例は、海外への発信と交流です。被災地の現状を説明し、この災害の経験を海外からの方々と共有しました。被災地を案内し、意見交換も行いました。今年、来訪者はアメリカ、チリ、フィジー、ジャマイカ、ベトナムからでありました。

私は3年間、多賀城高校で勉強してきました。防災について学ぶ機会がさまざまありました。高校生でもできることが、防災に関して、復興に対して多々あることが分かりました。また、夢も見出しました。私は多賀城高校の生徒であることを誇りに思っております。また、多賀城高校の後輩たちが学び続けることを期待しております。最後に、多賀城高校はこのような活動を通じてユネスコスクール登録を目指したいという考えを披露したいと思います。本日は発言の機会をいただき、感謝しております。ありがとうございました。